

毎朝  
目上  
招来  
六時

早小より先大正十二年春夏の頃加藤友三郎内  
務省晒林園一部実業家の向より批権問題が  
露西亜の承認を以て部志を歓迎し一部左遷思想  
宛の向より苦難即行を以て凡ゆる社会問題及  
心労働問題を解決せしむべきことを高調する  
者多し大正九年十月頃の直接行動黨能の時代  
を思ひ漸明反動期に入ゆる林園の形勢を體察  
しつゝ女りたる後藤新平は彼即北京より手  
つづいたを病氣療養の名目の文に林園へ招き  
たり使者として支那に行き去る者は東京毎

27

三條田十  
主務者  
周保

日新聞社長藤田君より主藤田は支那に着くや  
其内之知己の向極あり由り厚遇を仰いでヨ  
つ工女に後藤新平の意を傾けしむ  
藤田君は社長は社会問題、労働問題に關して  
は可なり力を傾倒せしむる物ありし大正九  
年頃より現在に渡り同盟主事加藤堪十郎は平澤  
君七葉をストライキ係争の記者として席聘  
せしたる故に大杉柴を以て社会主義者中に  
彼と懇親にして彼の庇護を受けたる者甚だ多  
く後藤新平は彼を擁護して社会主義者、労働運